

12 年 一 昔

田 沢 仁 (植物学教室)

1977年11月に阪大から赴任したのはついこの前のことのようにもあるし、また遠い遠い昔のことのようにもある。11月1日京都駅を早朝発って富士川の鉄橋を渡って富士の白嶺に接し得たときは、これからの12年余の予想される東大生活には幸先よいスタートのように思えた。さて理学部二号館につき、佐伯敏郎教室主任にお会いし、田丸謙二学部長にも一号館に行って着任の挨拶をした。植物生理学研究室に行き、ちゃんとした教授室があるかと思ったら、丁度二号館は改築の最中で、私の部屋は現在の生物学科共通図書室を入れて直ぐ右側に相当するところにあった一単位の何も入っていない空の部屋であった。当時助手であった坂野勝啓さんをはじめ、大学院生の諸君が、急いで廊下から机、椅子などを運び込んでくれて、一応居室の体をなした。その頃隣の分類の部屋には、原寛名誉教授もよく来られ、先生のお元気な声と黒沢幸子さんの笑い声がよく聞こえてきた。

当時の教授会は田丸謙二学部長の発案で、教授会前30分ほど誰かが研究上の話題提供をすることになっていた。私は佐伯主任から依頼されて、「シヤジクモの原形質流動」について、12月の教授会で映画をみせながら話をした。これを引き受けたときは、新任の教授はみんな自己紹介を兼ねて講演をするものと思い、やや義務的に引き受けたのだが、その後そんなことはない。聞くとところによると、皆さんの集まりも余りよくないので、いつの間にか立ち消えとなったようである。

1978年の4月から、私は改築の責任者ともいうべき二号館建物委員会委員長にされてしまい、坂野勝啓、井上康則両氏に助けられながら、施設部との折衝や、各教室間の調整など、慣れない身で大役を何とかこなすことができた。改築中は一号

館の4階の数学棟に室を借りて、狭いながらも、当時助手の新免輝男氏と阪大から博士コースに入学した河村剛太君と3人で実験を続けることができたのは幸いであった。よく屋上に上り上野の森を眺めたのも懐かしい思い出である。2号館と1号館の間を頻繁に行き来するため自転車の必要が生じ、茗荷谷の自転車屋で中古を一台購入した。この赤色の自転車には随分とお世話になり、評議員であったこの一年間は、再び一号館へ行く用事が増え、最後の御奉公をしてもらっている。

私のように昭和24年に新設された伝統の少ない阪大の生物学科から、100年の伝統をもつ老舗の植物学教室にきたものには、最初戸惑ったり、驚くことも多かった。たとえばパートでお手伝いに来ている人たちを出入許可と呼んでいたが、私には何か御用聞きのおかしかった。現在では補佐員という名前になっている。それから教授会が理学部も教室も講師以上で運営されているのに驚いた。阪大では教授会は教授だけで、そのせいか講師、助教授の責任は軽くいわゆる雑用と呼ばれるものは少なかったように思う。また教室主任の任期が1年でなく2年なのもちょっとしんどい感じだった。

さてこちらにきて感じたのはやはり歴史の重みだった。植物学教室には植物学教室としての歴史があり、動物学教室とは違う。小石川や日光の植物園は三崎の臨海実験所とは確かに違う。しかし人類学教室も含めて生物学科をつくっていることだし、特殊性を維持しつつも、生命の一般性をも追求するのだから、生物学科としてまとまていくことができないものだろうかと思っていた。物理学科は膨大な物質科学をかかえているが、学科としてはあくまで一つでやっている。生

物学科も本来そうあるべきだろう。生物学を一本にしようとする気運は、細胞生物学、分子遺伝学の進歩もあって、気分として個々の研究者にはあったと思う。それに拍車をかけたのは理学院構想であった。1988年理学院構想をまとめるため、一つは基幹理学院小委員会（委員長 上村洸教授）、広域理学院小委員会（委員長 田隅三生教授）が理学院計画委員会の下に設けられた。それより前に生物学科三教室は合同で三つの講座を概算要求していた（分子系統進化学、細胞生物学、分子情報生物学）。

上村委員会は、理学院化にともない学問の流動性に対応する組織として、生物科学大専攻、地球科学大専攻を設けることを切り札として提案した。そのための Working Group が、生物科学、地球科学関連教室の委員から出て、二つ作られた。生物関係は石川統教授（動物）、黒岩常祥教授（植物）、遠藤萬里教授（人類）、室伏擴教授（生化）、堀田凱樹教授（生物物理）からなる生物科学専攻構想ワーキンググループがつけられた。このグループの活動は生物学関連4教室の連絡を密にしたように思う。また臨時増による教員増1名が生物学科に割り当てられ、その人事を生物学科三教室合同で行ったことも、理学部内における生物学関連教室の存在を浮かび上がらせるのに役立った。現在、生命科学の重味が学問的にも社会的にも大いに強調されているが、東大理学部もようやくそれに応える体制ができてきたように思われ、私としても心おきなく退職できる気持でいる。

最後にこの一年間計らずも評議員に選ばれ、技官問題検討小委員会（委員：岩村 秀、岩槻邦男、熊沢峰夫、山本祐靖の各教授）の委員長、それに理学院計画委員会の中の事務・技官組織検討小委員会（通称 田沢小委員会、委員：安楽泰宏、熊沢峰夫、富永 健、山本祐靖の各教授、吉村宏和助教授）の委員長を勤めた。技小委の方で何と云っても忘れられないのは委員総辞職事件である。技術職員の組織化については前理学部長藤田宏先生、前委員長小口高先生らが大変努力され、組合

や技官とも折衝され、4月に上申できるような東京大学理学部技術部組織規程なるものを完成された。ところが他部局の組織化への取り組みが遅れており、理学部は上申を待たされた状態にあった。本部からの5月上申予定の再度見送られ、最終的に6月1日をめどに、他部局はだめでも理学部など組織案ができていところからはじめるということであった。しかし結局、東職の強い反対、全学の足並みが揃わないため有馬朗人総長は6月上申はしないことに決断された。6月16日の委員会では委員全員が憤りと深い失望感を表明され、この際全委員辞任すべきであるとの結論に達した。私も皆さんの心情に同調し、委員各位から私宛辞任を希望する手紙を理由を付して書いていただき、それをもとに6月21日付けの文書で委員長の私から上の委員会である企画委員長の久城育夫評議員に辞任を申し出た。しかし企画委員会としては、理学部の組織規程が否定されたわけでもなく、また辞任を安易に認めるとほかの委員会にも波及するおそれがあるという理由で、辞任は結局認められなかった。

この技小委やもう一つの田沢小委でもそうだったが、委員の方は大変自由にどんどん発言され楽しい雰囲気の中に作業が進められた。それに加えて技小委では、野島博事務長、木村登事務長補佐、橋本勝眞人事掛長が、田沢小委では野島事務長、木村事務長補佐、北川嘉一事務長補佐、小谷昭庶務掛長が委員会のお世話をして下さり、委員の足りないところを適切に助言して下さったことも大いに有難かった。おかげで曲りなりにも技小委としては企画委から諮問されていた理学部技術研修専門委員会内規を答申することができ、また田沢小委としては理学院に於ける事務機構についての素案を纏め説明会を開くところまで漕ぎつけることができた。委員ならびに事務官の方々に心からお礼を申し述べたい。

私のもう一つの役割は理学部の国際交流委員長であった。理学部には現在120名以上の外国人学生（修士26名、博士66名、研究生32名）が在籍

しているのに、これまで留学生の世話をする留学生担当教官（平成元年11月末までは守隆夫講師，現在高橋孝行講師）が面接などに利用できる部屋がなかったのである。和田昭允学部長，小林俊一建物小委員会委員長，野島事務長らの暖かい理解と努力により，ついにこの四月からは一号館一階会議室横に国際交流室が設けられることになった。

この部屋の英語名については，物理の山本教授から International Liaison Office というしゃれた名前をつけて戴いた。時の和，人の和があったのだとひそかに思っている。

私のように酒好きの我儘人間を12年間も置いて下さった理学部特に生物学関連の諸教室の皆様に心から感謝して去ります。